

舞台芸術に関わる図書館サービスについて ー演劇分野を中心にー

渡邊 花子

演劇は、脚本と演出、俳優の演技に加えて音響・照明効果や舞台美術が組み合わさった総合芸術である。その制作の過程においては、上演台本やチラシ等の配布物、衣装や小道具、舞台美術やその模型、内部資料、記録写真・映像、劇評など様々な素材や資料が生まれる。同時に、こうした資料や作品を作るためにはそれ以上の知識や情報、経験や資料が必要である。しかし、演劇の上演に関する資料には「演劇」や「演目」という共通点があるにも関わらず、その資料形態の違いにより散り散りになっている。系統立てて収集・保存し利用可能な形で公開している機関はごく少数である。

本研究では、演劇の実践・演劇研究の双方の観点から、演劇に関する図書館サービスの提供及び利用について整理し、演劇分野の研究・実践の双方における図書館の現状と今後の展望について検討することを研究目的とする。調査対象は、①舞台芸術を専攻できる大学の図書館の利用者で、演劇に関する研究を行っている(行う予定)の方、または演劇サークルに所属している(あるいは所属していた)方6名②舞台芸術に特化した図書館等施設(以下演劇図書館とする)の利用者3名③舞台芸術を専攻できる大学の図書館に勤務する職員3名④演劇図書館の職員やボランティア10名、の4区分である。調査手法として半構造化インタビューによる質的調査を用いた。調査は2021年11月～2022年1月にかけて、ZOOMを用いて1時間～1時間半程度実施した。一部の図書館等施設の職員については、先方の都合を考慮しWordファイルやGoogleフォームを利用した質問票での調査となった。

インタビュー調査からは、演劇研究を行う学生は研究目的で大学図書館・演劇図書館を活用することができていないことが明らかになった。問題として、利用者教育の不足に加え、実際の公演に関する資料へのアクセスの困難、そして教育現場と図書館の乖離がある。演劇図書館では、各館の特色に合わせた資料の収集と利用が行われているが、予算や人員の問題によりその資料収集と公開には限度がある。

演劇図書館が担っている公演資料や戯曲の収集と公開、また今後見込まれる公演映像の利用可能範囲の拡大は、演劇研究の発展に貢献につながる可能性を秘めている。しかし、資料を効果的に活用するための基盤は、図書館側も利用者側も整っていない状況である。演劇図書館の資料収集には限界があり、館同士の連携は欠かせないにもかかわらず、連携のための取り組みは行われていない。研究活動の基盤となるはずの大学図書館についても、現場との連携や利用者の図書館に対する意識の向上が課題となっている。

(指導教員 後藤嘉宏)